

大学生が保育士になるために ——保育士課程における最終実習の事前学習で学ぶこと——

田澤 薫

1. はじめに

聖学院大学では児童学科が指定保育士養成施設の指定を受けており、規定の単位を満たせば卒業時に保育士資格を取得できる。保育士資格取得には、他にも保育士試験に依る方法がある。しかし、科目が幅広く実技試験もあり、合格率は保育士不足の反映で2010年度の10.6 %から2016年度は25.8 %となるなど上昇が目立つものの難関に変わらない。養成校での取得が近道といわれる所以である。

一方で、養成校における資格取得も、おおむね270時間の保育実習を含む68単位が課せられ、負担は軽い。もちろん、それだけに学生の成長は目覚ましく、4年間で保育士としての知識や技能ばかりか人としても大きく成長する姿に驚かされる。そこで、保育士課程の中核に位置づく保育実習に焦点を絞り、保育士養成の教育力を探りたいと考える。その最初の取組として本稿では最終学年に配される二度目の、そして仕上げの保育所実習である「保育実習A」に光をあて、実習に臨む力を事前学習を通して学生たちが如何に築いていくかを整理したい。

「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」(平成15年厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知第1209001号)で、必修科目「保育実習Ⅰ」及び「保育実習指導Ⅰ」に加えて、選択必修科目である「保育実習Ⅱ」及び「保育実習指導Ⅱ」または「保育実習Ⅲ」及び「保育実習指導Ⅲ」を置くことが定められている。聖学院大学では、これらは、3年次の保育士必修科目「保育実習」及び「保育実習指導」(最初の保育所実習と居住型施設の実習をおおむね11日間ずつ)と、この単位を取得した学生を対象とする4年次の保育士選択必修科目「保育実習A」(再び保育所で責任実習までを実施)及び「保育実習指導A」、または「保育実習B」(児

童館や障害児通園施設等の通所型の児童福祉施設で実習)及び「保育実習指導B」である。集中講義扱いで開講される学外実習と、実習の事前・事後学習から成る「実習指導」は、セットで履修し単位取得することが想定されている。

筆者は、本学の着任以来2015年度まで7年間「保育実習」(3年次)を担当し、今年度は初めて「保育実習A」(4年次)を担当している。そこで、最初の学外実習である「保育実習」の「保育所における実習」(3年次6月)との比較を念頭に、児童学科の幼保課程の学生にとって最後の実習であり4年間の学びの集大成という意識が学生にも教員にもある「保育実習A」及び「保育実習指導A」について2018年度の指導内容を振り返りながら、この科目群を通して学生が学ぶ事柄を整理したい。

2. 「保育実習A」の目的

2002年児童福祉法改正により、保育士は「専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者」(児童福祉法18条の4)と定義された。

「保育実習A」は、「保育実習」と同様に、保育士の専門性を養うために、これまでに習得した知識と技能を基礎としながらこれらを総合的に実践する応用力を養い、また、児童に対する理解を通して保育の理論と実践の関係について習熟し、あわせて保育士としての職業倫理と子どもの最善の利益をどう具体化するかという課題について学ぶことを目的として行うものである。また、「保育実習」修了者だけが履修する科目であることから、「保育実習」を踏まえて専門性を高め、実践力を磨き、保育士倫理を身に付け、保育士になるための倫理観・知識・技能を養成することを目指す。

近年における保育士不足の一因として若者の保育離れも指摘されており、残念ながら児童学科で

も保育士資格を使わずに就職する者が少なくない。社会問題でもある「保育士の薄給」「3K職場」といった理由で忌避するばかりでなく、「指導案を立案して責任をもって保育を組み立てる自信がない」「保護者対応の自信がない」「同僚とうまくやっていく自信がない」といった、養成校で力を付けることで解消できそうな要因も少なくないと聴く。保育所と幼稚園の違いがよくわからず、自分に合った働きの場を選べず迷う姿も少なくない。

そこで、児童学科実習委員会で検討した上で、2018年度の「保育実習A」及び「保育実習指導A」は、特に以下の4点をねらいとした。1.保育所保育士として安全に就職できる力を身に付ける、2.保育で得意な領域をもつ、3.人とつながりながら、保育のしごとができる素養を身に付ける、4.人に愛され信頼される保育士有資格者になる、である。

「1」は、保育士として勤務する力を付けることを目指すという意である。「2」は、二年制学校でも同資格が取得できる今日、大学で保育士資格を取得する重みを考えて、保育実践や指導計画立案の拠り所とできる専門分野をもち自分らしさのある保育士養成をねらいとする。「3」は、連携と協働による業である保育士の同僚性を養うためである。「4」は、結果的に保育士として就職しない場合でも、保育士資格を取ることは意義深く、資格取得を諦めてはいけないという意味である。

これらを通して学生たちと教員が学び合い、単位取得時には、自分の保育の特性を知り保育所か幼稚園どちらでの保育が自分に向いているのかが判り、そのうえで保育所保育士として働いてみたいと考える学生は臆することなく保育所への入職が可能となるような力を養うことを目的とした。その具体的な方法を振り返りと共に整理したい。

3. 「保育実習指導A」の取り組み

上記に掲げた実習のねらいは、「保育実習Aの手引き」（聖学院大学児童学科実習委員会編）にも明記したとともに、授業の冒頭で学生に伝えて動機とした。そして、達成するために、「保育実習指導A」では以下5項目に取り組むことにした。1.保育指導計画を立てて実践する、2.一人で、理解して、考えて、判断して、言動をとる、3.誰かと組んで

作業を行う、4.保育で得意な領域を深める、5.負いきれないと感じたら、だめになる前に適切に援助をうける、である。この各々を説明する。

3-①保育指導計画を立てて実践する

まず「保育実習Aの手引き」を用いて、「保育実習」の「保育所における実習」と「保育実習A」の異同を学んだ。3年次の保育所実習は、例えば「内容」の最初に「1.実習施設について理解する。」「2.保育の一日の流れを理解し、参加する。」とあるが、4年次になると「1.保育所の保育を実践に実践し、保育士として必要な資質・能力・技術を習得する。」からスタートするなど、方向性や領域は同じでも、求められる水準が大きく異なる。今回の実習では何をねらいとすればよいのかを、文言の意味するところを追いつつ確認した。次いで、全国保育士養成協議会が示す「保育実習指導のミニマムスタンダード」から、この実習科目の「事前指導」の実習指導計画を学習者側からの文末表現に変更した一覧（表I）を利用して、大項目、小項目の双方において確認した。

大項目3にある通り、「保育実習A」の主たる到達点は、保育指導計画案を立てて一日の保育を実践することにある。そのため事前学習に模擬保育は欠かせない。学生は、本実習に至るまで、五領域（健康、環境、人間関係、言葉、表現）毎に開講されている「保育内容の研究」で、保育指導計画案を立案する方法を学び、科目によっては模擬保育を行う機会を得ている。ただし、それは各領域に特化した学びである。実際の保育では領域に区分はなく、五領域の要素が相互連関的かつ統合的に含まれる。そうした経験は、まだない。

そこで「保育実習指導A」においては、3回の模擬保育を行うことにした。

まず「模擬保育1」で、グループで協力しながら、童謡を題材にペープサートを作成し、5分程度の模擬保育を実践した。次いで「模擬保育2」では、「模擬保育1」をベースに、同じペープサートを活用して一人で3分の模擬保育実践を行う、その際に、保育内容を領域ごとに確認した上で、保育所保育の特性である養護性に着目し、保育指導計画案に配慮事項を反映させる。各自の保育指導計画案は

表1 「保育実習ミニマムスタンダード」に基づく「保育実習A」の実習指導計画

	大項目	小項目
1	保育全般に参加し、保育技術を習得する	デイリープログラムを把握し、保育全般に積極的に参加する 保育士の職務を理解し、保育技術を習得する
2	子どもの個人差について理解し、多様な保育ニーズへの対応方法を習得する	子どもの個人差に応じた対応の実際を学ぶ 子どもの発達の違いに応じた援助の方法を習得する 特別な配慮を要する子どもへの理解を深め、その対応について学ぶ 延長保育をはじめとする多様な保育サービスを体験し、その必要性を理解する
3	指導案を立案し、実践する	保育の一部分を担当する指導計画を立案し、それを実践する 一日の保育を担当する指導計画を立案し、それを実践する
4	家族とのコミュニケーションの方法を、具体的に習得する	連絡ノート、おたより等による家庭との連携を学ぶ 日常の保護者との対応に触れ、コミュニケーションの方法を学ぶ
5	地域社会との連携について具体的に学ぶ	子育て支援のニーズを理解し、地域における保育所の役割について学ぶ 園庭開放、一時保育等の実際に触れ、その地域の保育ニーズを理解する 地域の社会資源（児童相談所、小学校、図書館、医療機関等）との連携について学ぶ
6	子どもの最善の利益への配慮を学ぶ	保育所の理念、目標等から、その意味を理解させる 保育士の援助の方法や対応から、その姿勢を学ぶ 児童虐待の防止についての対応を学ぶ
7	保育士としての職業倫理を理解する	守秘義務の遵守について、实际的に理解し実行する 保育士の具体的な職業倫理について理解し実行する
8	自己課題を明確化にする	保育士に必要な資質について理解する 実習を総括し、実習を通して得た問題や課題を確認する 必要な今後の学習課題を確認する 課題を実現させていく具体的な方法を考える

書画カメラでスクリーンに映写し、その前で模擬保育を行うこととした。最後に「模擬保育3」では、各自がもつ保育研究テーマを活かし、多様な保育研究テーマをもつ5人で一つの流れのある保育計画を教員が示し、それに沿って各自が保育所保育の特性を踏まえ養護性・配慮事項を書き込んだ保育指導計画案を立案し、一人あたりおおむね3分間程度の模擬保育をつなぎ5人で15分間程度の流れのある模擬保育を行うこととした。保育士としての環境構成・準備物・発語計画・配慮を考えた計画立案と実践をねらいとした。

保育はPDCAサイクルのみでは成り立たない世界であり、Plan（保育計画）以前に「子どもの姿」がある。またDo（保育実践）も乳幼児との相互作用であり、Check（保育評価）もAction（保育改善）

も乳幼児への視点が必須である。それを、乳幼児不在の事前学習でいかに具体化するかが模擬保育の課題となる。いずれも学生が幼児役を務めるが、「模擬保育1」及び「模擬保育2」は模擬保育実践者の呼応役として存在するだけにし、「模擬保育3」では当該年齢の幼児あるいは養護課題を備えた幼児として独自にふるまう条件とした。

2) 一人で、理解して、考えて、判断して、言動をとる

学び合いをねらいとするアクティブラーニングでは、グループワークが一般的である。模擬保育も、グループワークで行われることが多い。しかし、これでは、最終実習にふさわしい「一人で責任をもって判断・行動のできる専門職である保育士」

に向けた練習ができない。短時間であっても、たった一人で前に立つ経験を全員に保障したい。

また、学生がこれまでに課題として取り組んできたのは「日案」と呼ばれる一日の保育指導計画案である。これは、乳幼児の一日の生活の流れを踏まえて保育を考える基本となるが、初学者は項目立てが中心になり過ぎて、細かな点の検討が行き届かない。そのため子どもの前に立ち、何と言葉を発するのか、教材はどのタイミングで何を提示しその際に何と言うのか、現場で往生することになる。そこで、短時間分でも言葉遣いを吟味し、該当年齢児に向けた伝わる発語を計画し実践した。課題のペープサートは「模擬保育1」で全員が全ての歌詞で演じたので、冒頭だけを演じ、後は割愛してその後の活動へのつなぎまでを実践した。こうして現実の保育の場では、完全なペープサートにその後の活動まで30分程度の保育実践の心積もりができたことになると学生たちを励ました。

保育実習日誌、保育指導案の記述・作成を負担に感じない実習生はいない。内容のある文章にして綴ることの課題性は言うまでもなく、それ以前に、漢字を正確に書くことを課題とする学生も3年次の実習段階では少なくなかった。そこで、保育所保育に必須熟語を厳選した漢字テストを授業時間に10問ずつ取り組んだ。問題・正答は「保育実習Aの手引き」に掲載し、事前準備・練習が可能な環境を整えた。またテスト形式で行うが、各自が「手引き」の掲載頁を見ながら正誤を確認し、間違えた熟語、不安だった漢字はチェックシートに自主的に書き出し、それを実習日誌に綴じ実習に携帯する方式をとった。これにより、自分が苦手・不安な事項を予めリスト化して手元におきながら正確かつ効率よく記録等を書くことができる環境を自分自身で築く経験をするようになる。

3) 誰かと組んで作業を行う

保育は自立した専門職である保育士が、保育士同士及び他職種と協働して行う活動である。ところが、協働は学生には容易な課題ではなく、保育士課程の科目でグループワークを行う際に、グループ決めそのものがトラブル要因となる場面が時折、児童学科実習委員会で報告されていた。

そこで、「保育実習指導A」では、「協働性・同僚性のイメージをもつ」ことを呼びかけ、初回授業時に「模擬保育1」の4人グループ及び手遊び発表の4人グループを別々にくじ引きによって決定し、その場でグループ構成メンバー氏名を確認することで後刻の交換の可能性を封じた。また、「模擬保育3」の5人グループも、個々の学生の保育研究テーマを踏まえて教員が流れのある保育計画を考えながら構成した。3年次までの幼保の科目はクラス分けして開講されており、別クラスの学生だと顔を名前が一致しない人も少なくない状況を踏まえつつ、このように「その場で」組んだ誰かと即、連携する練習を重ねる機会とした。

4) 保育で得意な領域を深める

保育者を目指す実習生として得意な領域、関心を深める領域があると、自信につながるばかりでなく、実習時にそのテーマに照らして乳幼児の姿に気付きやすく、テーマに引き付けて日々の実習目標を設定しやすく、その人らしい実習が自ずと組み立てられると考えた。そこで、「どんな保育士になりたいのか」と投げかけ、課題意識、関心、特性に照らして自分のテーマを決めるよう呼びかけた。例としては、乳児保育、障がい児保育、乳幼児と食、乳幼児の生活リズム・日課、乳幼児の睡眠、乳幼児の言葉、乳幼児の表現、乳幼児の人間関係、乳幼児のなかま関係、乳幼児の保育士との関係、幼児の描画、幼児の数量理解、幼児のグループ活動、幼児の当番活動、異年齢児保育、保育のなかの絵本、保育のなかの歌、保育のなかの年間行事、また技能テーマとして、描画指導、弾き歌い、運動遊び、手遊び、伝承あそび、ふれあい遊び、製作活動、おりがみ遊びを挙げた。

「保育実習Aの手引き」に上記項目を挙げ、実習生はマーカーで興味のある項目をチェックし、テーマを絞った。研究テーマについては、模擬保育3も各自のテーマに添わせて準備環境とし、実習中も意識して学んだうえで、実習後はアッセンブリアワーを利用して来年度の受講予定学生たち（本年度「保育実習」受講生）と今年度の「保育実習A」受講生合同の「保育実習研究発表会」を開催し各自が自分の学びを語る機会を設けた。

保育の領域は広く専門性は高く一人では担いきれない、保育現場では多くの保育者が各々に得意分野を牽引している、その領域が得意な保育者のリードに周囲の保育者たちは学びあっている、互いの研究成果がみんなの保育を豊かにするということを体験できるようにという趣旨は共有されたと感じられる。

5) 負いきれないと感じたら、だめになる前に適切に援助をうける

自己覚知については「保育実習」の時点で既習であるが、自己評価と混同し、自己肯定感を保ちにくい場面も少なくない。一方で、専門職として巣立つ直前の実習として、自分で自分の状態を把握し、辛いときには自分から援助を受けられる判断力と行動力を養成することも必須である。

そこで、事前学習の時点では個別面談を課すことは避け、それに代わる学生からの申し出る機会を2度設けた。まず初回授業時に「「保育実習」を振り返って」のワークシート提出を課し、そのなかで「保育実習A」に向けた不安や心配事を問うた。次に、4週間の幼稚園実習が終わり、「保育実習指導A」の授業が再開できた時点で、再び、ワークシートを課し、そのなかで、個別面談希望及び教員に伝えたいことの有無を問い、要望があった学生には個別面談機会を設けた。

「保育実習A」に取り組んでいる実習生は、保育士になることを望むことができ、なりたい保育士を求めることができる場所に位置づいていること、自己覚知は自己の限界を知ってあきらめることではなく自覚した自己特性にどう向き合うかが問われていることを、伝えるよう心掛けた。

項目立ての趣旨を学生はよく受け止め、上記の機会を超えて個々にメールや来室により相談してきたり、幼稚園実習の影響で「保育実習指導A」の授業が変動的になった期間を有効に活用して、出席を要さない授業回にも重ねて出席して学びを深めたり、個別の補講を求めたり、授業担当者から「適切な援助をうける」ことに積極的だった。

3. 「保育実習A」受講生の成長

1) 覚悟が決まる

一般に、全員が渾身の課題を提出することにはなりにくい。しかし、「保育実習指導A」の模擬保育時に、自分の指導案が教室のスクリーンに大写しになり、参観者は指導案と照会しながら模擬保育を見るという形式をとったところ、全員が、その人なりに精一杯の力を注いだ指導案を用意して臨むことができた。教師の評価よりもなかまの眼が、彼らの頑張る動機になることが明白になった。

また、初回の模擬保育は4人グループで実施したところ、「歌詞がうろ覚えで」とか「ほかの人の後ろに隠れて」といった反省がまだ聞かれたが、一人での模擬保育では、全員が見事に幼児役の集団の前で歌い、手遊びを行い、堂々とやり切った。時間の長短によらず、「一人で」の経験が、4年間の学びで培ってきた知識や技能に加えて覚悟を決める契機として有効であることが示された。

2) 保育士になっていく

良好ななかま関係の中でグループワークは互いに弱点の庇い合いが起こるため一人ずつの模擬保育実施にこだわったが、これは受講生40人のクラスでは非常に困難であった。しかし、学外実習は前年度の申込が履修の前提であるため前年冬の時間割作成時には凡その受講者数が判っており、対策をたて、4・5時限に続きで授業時間を確保し環境を整えた。

模擬保育の際には、全員の模擬保育に対して、全員が当事者であるように工夫した。すなわち、必ず、①模擬保育実践者、②幼児役、③模擬保育鑑賞者のいずれかである。また、模擬保育鑑賞者は、かならず1回は「講評者」として「スクリーンに映写されている模擬保育指導案および模擬保育をみて、特によかった点と課題が残る点」をその場で口頭指摘する役割を担う。授業担当者は個々の模擬保育については、その場での指摘は行わず、当日に提出される「模擬保育指導計画案」と「模擬保育報告書」に講評を記して返却することで、個々の学生に対する必要な指導を実施した。

顕著であったのは、「講評」である。これまでに

授業で模擬保育の経験がある場合も必ずグループ実践であったため、一人が行った模擬保育に一人が講評するという緊張関係は初めての体験だった。講評者は、4年の付き合いの中での相互理解を踏まえて、言葉を選び、その人に向けたメッセージを適切に送っていた。その人が備えている底力を知った上での今回の模擬保育の頑張り具合を評価し、課題がその人の本質に触れる場合には人格を傷つけることのないように伝え方を工夫していた。加えて、「模擬保育報告書」に記された「自らの講評への振り返り」には、結果が芳しくなくても努力を知っている者として言葉を選びながら話していて「実習先の指導者も同じ思いなのだ」と気付かされたという感想や、今回のような講評が保育者同士の同僚性につながるものだと感じている記述もあり、次の授業時に紹介して共通理解とした。

4. おわりに

旧来から「保育実習A」は4年間の集大成という意識が学生にも教員にも強かったことから、「保育実習Aの手引き」の巻末に、「全国保育士会倫理綱領」に並べ、「聖学院大学人間福祉学部児童学科ディプロマポリシー」を掲げた。

「人間学を基底においた児童学」を通じて培った他者理解の方法論や感受性を基にして、言葉・

人間関係・子どもの文化に関する素養を身につけた人を育てる」(聖学院大学人間福祉学部児童学科ディプロマポリシー①)を実習に臨む姿勢のベースとして、「発達理論や心理学の知識を土台にして

子どもの「言葉にならない思い」を汲み、保育技術と対人援助技術を身につけてその思いに寄り添える実践者を育てる」(聖学院大学人間福祉学部児童学科ディプロマポリシー②)ことは正に「保育実習A」での実習のねらいにほかならず、「資格取得を求める学生に対しては、責任感と倫理観を備えた子どもを育てる専門人として、子どもとその家族の良きパートナーになり、子どもが生きやすい環境づくりと社会全体の福祉に貢献できる小学校教諭、幼稚園教諭、保育士となるよう育成を図る」(聖学院大学人間福祉学部児童学科ディプロマポリシー③)については実習生本人が目指している自己像と重なるものである。

「保育実習」で「全国保育士会倫理綱領」の謳う「私たちは、子どもが現在(いま)を幸せに生活し、未来(あす)を生きる力を育てる保育の仕事に誇りと責任をもって、自らの人間性と専門性の向上に努め、一人ひとりの子どもを心から尊重し、次のことを行います。／私たちは、子どもの育ちを支えます。／私たちは、保護者の子育てを支えます。／私たちは、子どもと子育てにやさしい社会をつくれます。」と重ねて、児童学科のディプロマポリシーが、私たちが養成する保育士像を改めて学生に示しており、「保育実習A」及び「保育実習指導A」の科目としての方向性も、自ずと示されていると考える。

(たざわ・かおる 聖学院大学人文学部児童学科教授)